

「いつまでも気持ちのよい黄瀬川を」

長泉町立北中学校二年 安澤悠太

僕の家の前には、黄瀬川が流れている。黄瀬川は県東部を流れる一級河川・狩野川水系最大の支流だ。毎日、川を流れる水音が聞こえて、とても気持ちよさを感じるが、大雨になるとその印象は一変する。数年前の台風による豪雨では、近くの家が流されたり、橋が壊れたりした。僕はここ数年、豪雨のたびに黄瀬川が氾濫しないかと冷や冷やしている。

そこで、黄瀬川を含めた日本中の川の氾濫を防ぐために、自分たちにどのようなことができるのだろうかと考えた。

筆者は言う。川の氾濫を防ぐためには、市や町がもっと堤防を強化したり、ダムや調節池を造ったりしていく必要がある、と。では、僕たちが暮らす長泉町ではどうだろうか。ホームページには洪水のシミュレーションや避難所の位置などを示したハザードマップが載せられている。また過去には、それが家に届けられたことあった。

だからかもしれない。僕はこれまで、川の氾濫の防止は、市や町の力で成しえないと思っていたのだ。しかし、この本を読み進めていくうちに、自分達でもできそうなことが確かにあると考えるようになった。

例えば、大雨で排水溝などがあふれているときには、自宅のお風呂の水を流したり、キッチンで洗いをすることを控えたりすることだ。これらの方法は「流域治水」と呼ばれる。一人一人がこの流域治水を意識することで、川の氾濫による災害を少しでも防ぐことだできそうだ。

次に僕が着目したのは、近年の大雨の降り方だ。年間で一日当たりの降水量が二〇〇ミリ以上になった日数を、一九〇一年からの三十年間と一九九〇年からの三〇年間で比べてみると、実に一・七倍も増えたと筆者は述べている。この問題の背景には、地球温暖化が関係している。

そこで、僕は地球温暖化の原因とその影響を遅らせる方法について調べ、考えてみた。

まず原因としては、二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスの影響がある。温室効果ガスは、自動車や飛行機を動かしたり、ゴミを燃やしたり、また電気を作る際にも発生する。したがって、今の生活でこれをゼロにすることはかなり難しい。

それならば、せめて温暖化を遅らせることはできないだろうか。地球規模の問題ではあるが、実は自分たちの身近な生活の中でできることはいくつもあった。

一つ目は、家庭や学校などで節電することだ。例えば、家の中の電球をLEDにしたり、省エネタイプの電化製品に交換したりするなどして、消費エネルギーを減らすことだ。二つ目は、食生活の改善だ。例えば野菜を多く含んだ食品を食べることが、温室効果ガスの排出を抑えることにつながるという。植物性食品を生産する際に出る温室効果ガスは、動物性の食品よりも少なく、そこに必要なエネルギーも節約できる。しかも、使われる土地や水の量まで少なくすることができるのだ。

廃棄食品を減らすことも重要だ。食わずに捨ててしまうのを、ただ「もったいない」という一言だけで済ませてはいけない。その食品を製造・加工・梱包・輸送するために使った資源やエネルギーが全て無駄になってしまうのだから。さらに、廃棄物の埋め立て地で食品が腐敗すると、強力なメタンガスが発生する。目立たない事実だが、こういうことの積み重なりによって、現在の地球温暖化問題は深刻化しているのだと僕は考える。

つまり、僕たちが物やエネルギーをもっと節約できなければ、温暖化は進む一方であるということだ。そして、それは異常な大雨をもたらす原因となり、これから川の氾濫や大洪水はもっともっと増えてい

くだらう。

僕は今まで、川の氾濫は自分とは遠く離れた問題だと思っていた。しかし、実際はとても身近なもので、なおかつ自分たちの力で変えていけるものだと思った。このことを他の人たちにも知ってほしいと思う。

山地が多く、狭い土地を流れる日本の川は大雨に弱い。大雨で川からあふれた水が、建物に流れ込んだり、土砂崩れを引き起こしたりする被害が各地で頻発している。そんな今だからこそ、川の流域にある市や町は荒川の「流域治水」に学ぶ必要があると僕は考える。

そして、僕たち一人一人ができることを精一杯やっていきたい。まず、日常の生活から「節電」「節水」を意識することが大切だ。また、廃棄食品の問題にも真剣に向き合いたい。購入した食品は使い切り、食べ残しは全て分別して堆肥にする。とにかく実行だ。

国連のグテーレス事務総長が先日、「地球沸騰化の時代が到来した。」と発言した。この発言は、今の地球がどれだけ危機的な状況にあるかを意味している。今こそ世界中の人間が、大雨の災害とそれを引き起こす地球温暖化に対して、真剣に考え、行動していくときではないだろうか。